

( 続紙 1 )

|   |   |    |       |
|---|---|----|-------|
| 京都大学  | 博士 ( 人間・環境学 )                                     | 氏名 | 橋本 周子 |
| 論文題目  | グリモ・ド・ラ・レニエールと「美食家」の誕生<br>—フランス革命前後における食行為に関する研究— |    |       |
| (論文内容の要旨)   |   |    |       |
| <p>本論文は、18世紀後半から19世紀初頭にかけて活躍したフランスの美食家、グリモ・ド・ラ・レニエール (1758-1837) が行った文芸的活動を、当時の社会的・思想的状況に照らし合わせながら考察し、フランス革命前後の社会において美食行為が、いかなる意味の転換を経験したかを明らかにしようとするものである。</p> <p>18世紀まで「大食漢 glouton」と同義の悪徳として理解されていた「美食家 gourmand」という概念は、18世紀末から19世紀に至る時期に一つの美德へと転換する。この変化にまさに立ち会い、また積極的にその変化をうながしたのが、グリモであった。本論文は、こうしたグリモのテキストを、①読書欲を駆り立てる文芸作品として、②新たな社会に対する社会批判として、③アンシャン・レジームの遺産を継承するための思想として、という三つの側面から横断的に考察する。</p> <p>第一部は、美食という世界が、一つの芸術とも呼ばれるような奥深さを得ていく端緒を、グリモを通して考察している。華美で洗練された生活が時代的風潮となった18世紀のフランスでは、美食がすでにかんりの高みに達していたことが、グリモの『美食年鑑』に先立つ食の年鑑を調査することによって確認される。グリモはそこに評価という規準を持ち込み、美食批評というジャンルを確立したのである。さらに、美食に関わる事象として単に食材のみならず、広く技芸に関わる物事を作中に盛り込もうとする視野の広さは、彼に先立つ『百科全書』とも部分的に共通するような「技術＝芸術」観を感じさせるものであった。グリモの目にはあらゆる産業が美食に関わるものとして映る。それを描き出すにあたって彼は、味覚的ではなく視覚的な描写に努め、読者の食欲を刺激することに成功した。しかもそこには、食と性を交錯させるエロティックな視線も垣間見られる。</p> <p>第二部では、グリモの時代以降、今日に至るまで深遠な美食の世界を作りあげてきた原動力が、実は他者との競争によって自らを規定しようとする人々の競争心ではなかったかと主張する。従来のフランス食文化史研究では、グリモの名前は、輝かしく発展を続ける美食の街パリを高らかに賛美した証言者として引用されてきた。たしかにその側面も否定できないが、一方でグリモは、新種の情念が人々の間に芽生えつつあったことにも気付いていた。革命前にすでに誕生していたレストランの本質を変化させ、その数を飛躍的に増加させたもの、それはいずれヴェブレンが描き出すことになるような「妬みを起こさせるような比較」を基礎におく経済動機であったのであり、この情念は19世紀初頭のトクヴィルが指摘した、近代民主社会の負の側面を構成する一要素でもあった。美食によって太った身体を持つブルジョワたちを、人々は嫉妬に満ちた視線で描く。太鼓腹は、卑しい上昇志向と富という尊厳を同時に表現するものとなった。かつて社会的</p> |   |    |       |

威厳を示すものとして重要視された作法は、身分と切り離され、作法書やワインに代表されるように、金であがなうことのできるもの、つまり消費の対象となっていく。

第三部は、こうした負の側面を持つ美食の肯定的側面について考えている。一言でいえば、それは社交、すなわちおいしいごちそうを囲み、ともに食事することの喜びである。グリモが提示した招待のための諸規則は、一見すれば突飛で、現実に適用するにはあまりに厳格すぎるように思えるが、それらは仮想の世界を描くためにのみ持ち出されたのではない。フランス革命以前のグリモの言動や、革命について彼が述べた言葉を熟視するなかで見えてくるのは、18世紀に支配的であったとされる社交への情熱であった。かつてあった「心地よい社交」が革命を機に失われたと痛感したグリモは、そうしたかつての美風を残存させる可能性を食卓の周囲という限定された場に求めたのであり、それこそが「美食の帝国」と彼が呼ぶものが意味するところであった。19世紀に入って、18世紀を憧憬する言説はグリモ以外にも多くの作家によって書かれることになるが、グリモは単に過去を称賛するばかりではない。彼は、ささやかながらも確実に、かつての社交を保存するための手段として美食を選んだ。そしてこの意味において、ひとえに美食を目的とするようなグリモのユートピアは、現実の世界に向けて構想された一つの実験的な思想なのである。

(論文審査の結果の要旨)

食べるという行為は、すべての人間が行っている行為であり、あらゆる民族や国の文化のなかには食に関わる文化が含まれている。しかしそれをきわめて繊細かつ広範な形で育成してきたフランスの食文化は、かつて今も世界の最高位に位置していると言ってよいだろう。本学位申請論文は、そうしたフランスの食文化の歴史において、重要かつ個性的な業績を残したにもかかわらず、これまでブリヤ＝サヴァランという同時代の人物の影に隠れて、あまり詳細な研究がなされてこなかったグリモ・ド・ラ・レニエールという「美食家」を、書く・見る・(ひとと)交わるという多面的な視点から包括的に捉えようとした優れた論文である。

申請者はまず、論考の出発点として、フランス語のgourmand(グルマン、この言葉に申請者は「美食家」という日本語をあてている)という言葉の歴史をたどり、gourmet(グルメ、味きき)などといった類似の言葉と比較しながら、グリモがこの言葉に与えた意味の新しさを明確にしようとする。申請者によれば、グリモが活躍した18世紀末から19世紀はじめにかけて、この言葉は、否定的な意味での「大食」から、多く食べかつ味わうすべを知っているという肯定的な意味を獲得していった。グリモの『美食年鑑』はナポレオン帝政以降の新興富裕層にとって、まさにうってつけの指南書だったのである。

第一部では、グリモが書いた『美食年鑑』の作品や文章としての特徴を、「旅・道程」と「事物や地名の列挙」といった点に焦点をあわせながら検討し、当時の食をめぐる産業・商業の活力や、芸術の領域にも接近しようとする料理技術の進展、さらには性的な快楽との交錯までもが、グリモの筆によって描かれているとする。グリモの作品は、通常の文学作品とは異なった仕方で読者の想像力を刺激するように書かれているとすることができるだろう。

第二部では、近代社会として成立しつつあった当時のフランス社会の観察者としてグリモを捉えようとする。グリモが「消費者」と形容する新興富裕層は、彼自身が属していたアンシャン・レジームにおける支配階級が体現していた食の作法を知らない。彼らにとって食もまた近代の市民社会を特徴づける競争の原理のもとにあるのである。グリモは招待のための厳しい作法書をしたためて、そうした傾向を批判するのだが、それがまた当の批判の対象たる人々にとっては格好の「手引き」になるという皮肉な状況を生むことになる。

第三部では、グリモを思想家として捉えようとする。グリモは青年期から奇妙な昼食会や夜食会を催していたが、彼にとって美食という行為は、単に料理を食べることではなく、常に人と交わることも意味していた。アンシャン・レジームにおける「定食制食堂(ターブル・ドット)」は、多くの作家によって排他的であると否定的に描かれているが、そこに成立している文化や習慣を共有した者たちによる相互の気遣いに基づいた人間関係を、グリモは彼の言う「美食の帝国」の理想と考える。ここにも

同時代に爆発的に増加しつつあったレストランにおける競争的な人間関係に対する批判的な眼差しがあると言えるだろう。

全体として、周到な資料調査に基づいた優れた論考であるが、欠点がないわけではない。たとえば、グリモの主著たる『美食年鑑』の作品としての全体的な特徴が、個々の主題の分析を優先した結果、見えにくくなっている。またヴェブレンやトクヴィルといった思想家が用いた概念（たとえば後者のアソシアションなど）を、あまりにも単純にグリモの美食に適用しているというところも改善されるべきであろう。論述で使う言葉の選択や歴史認識に関しても、さらなる慎重さを求めたい。

とはいえ、グリモの美食のなかには、同時代の趨勢に対する批判と同時に、フランスにおいて伝統的に培われてきた食文化の本質の新しい表現があるという本論文の主張は、十分に説得的であると判断できる。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値を持つと認める。また平成24年7月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。  
要旨公開可能日：           年       月       日以降